

## コロナ禍でも活発に続く市原養豚研究会の活動

～生産者同士の継続したコミュニティによる生産技術の向上のために～

### 1 活動のねらい

市原市と千葉市の養豚生産者8名で構成されている市原養豚研究会は、月に1回、定例研修会（以下、定例会）を実施しています。近年、養豚経営をめぐる情勢は、家畜伝染病の危機や、飼料高騰など厳しいものでありますが、農業事務所では他の関係機関と連携し、会員同士が生産技術や衛生管理などを情報交換し、自身の経営に生かせるように活動を支援しました。

### 2 課題の背景

市原養豚研究会は、昭和59年に設立された歴史ある学習組織で、市原市内の公民館に集まり、定例会の他、枝肉互評会（年1回）を中心に活動してきました。令和2年3月の新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を受け、緊急事態宣言下で、公民館での定例会の開催ができなくなりました。生産者たちは、養豚経営の厳しい情勢が続くなか、会員同士のつながりは貴重なものだと再確認しました。宣言が明け、活動を再開しましたが、今後は、研究会活動を止めずに継続していきたいとの声が多く挙がりました。

### 3 普及活動の経過・結果

#### (1) リモート会議の開催に向けて

緊急事態宣言下で定例会の開催を検討したところ、会員全員がリモート会議を開催するための環境を持っていたため、インターネットを利用したリモート会議を行うことにしました。公民館の会議室に端末を持って集まり、リモート会議の操作方法の練習機会を設けました。また、操作方法をまとめた資料を作成し、会員が参加しやすくなるように支援しました。

今年度は、リモート会議による定例会を本格的に開始することができました。その後は情勢をみながらリモート会議と集合研修とを臨機応変に行っています。



写真1 リモート会議を行う  
会員の様子

#### (2) コロナ禍での養豚経営の維持に向けて

コロナ禍になり、会員が新型コロナウイルスに感染した場合に、農場内の作業をどうするかが課題となりました。会員全員が主体的に作業を行っているため、代替要員が必要になることが考えられました。酪農のようにヘルパー制度はなく、疾病がまん延しやすい養豚経営での代替要員の検討

は難航しました。様々な話し合いがされましたが、距離の近い農場の会員同士で、助け合うことになりました。養豚の作業は農場によって大きく異なります。そのため、代替要員の検討と並行して、代替要員が来た際にすぐに作業内容が理解できるように、農場の作業マニュアルの作成を支援しました。

今日まで新型コロナウイルスに感染した会員はなく、現在も月に1回定例会を続けています。まだまだコロナウイルスの終息には時間がかかると思いますが、養豚経営を継続していけるよう今後も会員相互の協力と関係機関との連携を支援していきます。

### (3) 飼養管理の改善に向けて

市原養豚研究会では、飼養管理技術の改善、生産技術分析を研鑽する場として、毎年千葉地域の他生産者と合同で「枝肉互評会」を開催しており、令和3年度も開催することが出来ました。今年度の枝肉審査では、と体長やと体幅を測定したことで、生産者ごとに傾向がみられることが確認できました。

枝肉の外観や肉質にも特徴が見られ、審査講評会では、上質な豚肉を生産するために、飼養管理について活発な意見交換が行われました。生産者は、飼養管理の改善について、興味・関心が高まった様子で、今後は生産技術向上に向けた、知識の習得や会員同士の飼養管理方法の情報交換を促進していきます。



写真2 枝肉互評会の審査の様子

## 4 今後の課題

リモート会議で定例会を行うと、自宅から参加できることから、会場までの移動時間の短縮となる利点がある一方、一人一人の発言機会が少なくなる欠点があります。そこで、限られた時間で、会員同士の積極的な意見交換ができるようにサポートしていきます。

千葉地域の養豚経営を発展させるために、経営改善につながる取組の実現の支援を行っていきます。

5 担当者 市原グループ 山下 瀬里奈

6 協力機関 市原市、JA市原市、千葉県農業共済組合中央家畜診療所  
千葉県農業共済組合けいよう支所、千葉県中央家畜保健衛生所